

2023 年 7 月 20 日

2022 年度海外留学実績報告書

留学者	留学先	期間	留学課題
全学教育機構 高等教育センター 教授 佐藤 克彦	イタリア (University of Padova, Department of Chemistry)	2022 年 9 月 14 日～ 2023 年 2 月 15 日 (155 日間)	Computer Simulation Studies of Anisotropic Mixtures パドヴァ大学 化学科およびイタリア 学 術 会 議 (PAdova Unit)
2022 年 9 月より翌年 2 月までの 5 か月間、短期留学制度を利用してイタリアのパドヴァ大学に滞在した。ここでは設備の整った研究室を用意して頂き、集中して研究課題であるイオン液体・液晶化合物の分子間相互作用と相形成、そして電荷の影響に関する理論研究に取り組むことができた。また、多くの文献の調査や大学院生や共同研究者との議論は非常に有益であった。得られた成果の一部を英国化学会の専門誌に投稿し、受理され掲載が決定している。さらに今年度中に国際学会での 2 件の発表も予定している。 滞在したイタリア北部にあるパドヴァは「大学者の街」とも呼ばれる中世と現代の街並みが融合する学生や学者に寛容な街である。ここで進取の気性に富んだ先駆者たちの 800 年を超えるパドヴァ大学の歴史を間近で知ることができただけでなく、教員や多くの国や地域から集う学生たちとの対話から大いに刺激を受け、日本の学び方との違いを強く感じた貴重な機会であった。			

2023 年 8 月 21 日

2022 年度海外留学実績報告書

留学者	留学先	期間	留学課題
経済学部 経済学科 教授 門 闕	イギリス ロンドン大学アジア アフリカ研究学院 (SOAS University of London)	2022 年 4 月 1 日～ 2023 年 3 月 30 日 (364 日間)	中国対外金融シス テムの史的展開に 関する研究
・ <u>留学の概要</u> 報告者は、2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 30 日まで留学先・ロンドン大学東洋アフリカ研究学院中国研究所（SOAS China Institute）の客員研究員として 1 年間滞在した。留学期間中は、Steve Tsang 教授指導の下、SOAS を拠点にアーカイブ資料の収集や論文執筆・報告などを行った。研究テーマは中国対外金融システムの史的展開に関する研究であるが、研究の内容は、中国の金融システムが形成された時期における民間銀行の統合や中国人民銀行の成立過程で生じた中国の金融制度の変容とそれが対外関係に与えた影響について考察するものである。 ・ <u>研究の内容</u> 留学中は、上記の研究テーマに基づき、関連する歴史的な文献や統計データを収集・整理しながら、留学前から着手し始めた研究書と論文の執筆を行った。 (1) 英国における公文書や銀行資料の調査 報告者はこれまで中国対外金融システムについて中国国内の文献を中心に行ってきた。海外における中国銀行支店の現地活動や外為の使用をめぐる外国政府との交渉などについては、利用できる資料がないため、究明することができなかった。今回の留学を利用してここまでベールに包まれたままの歴史に関連する資料の発掘を行った。資料調査を行った場所は、SOAS アジア・アフリカ図書館や、ロンドンにある国立公文書館（National Archives）とイングランド銀行資料館（Bank of England Archives）である。 SOAS 図書館では、近代中国をテーマに資料を調査したが、1950 年代以降の資料は金融関連のものが多く収集できなかった。定期的に通っていた国立公文書館では、イギリス外務省の調査資料を中心に、在外公館が行った調査（英植民地からコモンウェルスへ変化する過程で在外公館の性格も変化）で取り上げた中国銀行の動向や貿易支払いをめぐるアーカイブ文献を整理した。金融に関連するアーカイブ資料を多く収集できたのは、イングランド銀行資料館であった。植民地香港や上海などを通じ中国と深い経済関係をもつ			

イギリスは、第 2 次大戦前からイングランド銀行の専門家を中国に派遣した。イングランド銀行では、これらの専門家による報告書や電報が大量に所蔵している。報告者は、留学期間を利用して 1930 年代から 1960 年代までの関連アーカイブを収集・整理した。これらの収集した資料は、冷戦期における中国の対外金融活動に関する研究に一部が利用できるだけでなく、対外関係の視角で中国の金融の歴史を読み解くためにも有用と期待される。

(2) 中国金融システムに関する史的研究

冷戦期における中国金融制度の大きな変化の 1 つは、中国人民銀行を頂点とする金融システムの形成である。これによって、資金供給・配分の仕組みが大きく変更されたのみならず、外為の管理・使用など金融業務の流れも全国における人民銀行ネットワークの確立を境に大きく変わった。金融制度の変更をめぐってこれまで報告者は、人民銀行を支配する金融官僚の役割や中小の金融機関と人民銀行の関係に注目して研究を進めてきた。いずれも長年にわたって取り組む課題で、イギリス留学の前からも学会報告や論文の執筆を重ねてきた。

しかし、留学によって、大きく変化した点もある。それは、従来資金の往来など金融構造といった側面を重視することから、官僚システムのヒエラルキーや金融機関を取り巻く政治環境の変化など政治経済の枠組みにシフトした点である。こうした変化をもたらしたのは、滞在した SOAS 中国研究所の教授陣の多岐にわたる研究内容である。そのほとんどは複数のディシプリンにまたがる学際的な研究であり、在籍する先生方と学術交流を深めていくうちに、経済学以外のアプローチも自分の研究に取り入れるようになった。金融官僚システムに関する研究では、政治指導者や政治官僚との関係の究明を課題の 1 つとして論文の執筆を進めてきた。また人民銀行を頂点とする金融システムの形成については、中小金融機関の創設や経営における政治運動の長期的影響を吟味・考察した。

(3) 研究成果の公開

留学中に執筆した論文は、まず学会報告を中心に研究成果の公開を行っている。金融官僚の歴史に関する研究は、ロンドンに滞在する間に日本金融学会春季大会（オンライン参加）や世界経済史フランス大会で論文報告を行った。また新たな枠組みで書き直した人民銀行を頂点とする金融システムの形成に関する論文は、留学修了後に 2023 年アジア政経学会春季大会や政治経済・経済史学会秋季大会（予定）にて論文報告を行っている。いずれも学会報告を通じて論文の完成度を高めたうえで学術雑誌への掲載を期待している。

また留学先との交流を続けるため、定期的に SOAS 中国研究所ブログ (<https://blogs.soas.ac.uk/china-institute/>) にて研究成果の公開を予定している。すでに第一弾として中国金融監督の歴史をまとめる研究の紹介を公開している。